ブリーフィング・メモ

「トゥキュディデスの罠」を考える

戦史研究センター国際紛争史研究室長　石津　朋之

1962 年 10 月のキューバ危機の実情を鮮明に描いた名著『決定の本質――キューバ・ミサイル危機の分析』で知られるアメリカの国際政治学者グレアム・T・アリソンは、2013 年６月の『ニューヨーク・タイムズ』での論考「オバマと習〔近平〕は古典的な罠に陥ることを避けるため、大局的に考えなければならない（Obama and Xi Must Think Broadly to Avoid a Classic Trap）」の中で、古代ギリシアの歴史家トゥキュディデス（紀元前 460 年頃～400 年頃）が示した戦争の原因を考えるための「3 要素」を援用しながら、今日の国際政治、とりわけアメリカと中国の関係について論じている。

この論考の基礎となっていると思われるものは、リチャード・N・ローゼクランスとスティーブン・E・ミラーの共編著『次なる大戦争？――第一次世界大戦の源流と米中対立の危機』に収められているが、同書のタイトルが明確に示す通り、これは 2014 年に第一次世界大戦開戦 100 周年を迎えたヨーロッパの 100 年前の情勢と、2014 年のアジア地域の国際政治を類比する試みである。

１．戦争の原因をめぐる３つの要素

周知のように、トゥキュディデスは古代ギリシア世界のスパルタとアテネの戦争、ペロポネソス戦争（紀元前 431～404 年）について記した『歴史』の中で、戦争が勃発する原因として「利益」「名誉」「恐怖」という３つの要素を挙げた。富の追求、名誉への欲望、そして恐怖から逃れようとする行為が、人々を戦争へと駆り立てると言うのである。

なるほどトゥキュディデスは、この３つの要素を明示してはいないが、例えば『歴史』には、「（前略）与えられた支配権を引き受けた以上は、体面と恐怖と利益の三大動機に把えられて我々は支配圏を手放せなくなったのだ」（上巻、70 頁）、といった記述が見られる。

確かに、こうした３つの要素はその意味するところがかなり曖昧である。だが同時に、戦争の全般的な原因を理解する上で最も包括的かつ有用な視点を人々に提供し得ているものとして、トゥキュディデスが今日に至るまで読み継がれていることもまた事実である。実際、『歴史』は国際政治学を志す者であれば１度は手にすることになる基本文献と位置付けられており、国際政治学の教科書の多くでその内容が紹介されている。今日の国際政治学が取り扱っている事象や概念は、既に全て『歴史』の中に書かれているとの評価すら存在する。

２．台頭国に対する支配国の「恐怖」

このトゥキュディデスの３要素を参考しながらアリソンは、今日の米中関係をスパルタとアテネの関係と類比して論じたのであるが、その核心は、「アメリカと中国はトゥキュディデスの罠を回避できるか」との問題意識である。『ニューヨーク・タイムズ』での彼の論考

のタイトルにある「古典的な罠」とは、まさに戦争の原因をめぐる３つの要素を基礎とした「トゥキュディデスの罠」と呼ばれるものに他ならない。

アリソンによれば、西暦 1500 年以降、大国間の関係が緊張した 15 個の事例のうち 11 個で、「台頭国」と「支配国」の戦争が勃発した。だが逆に、19 世紀末以降に見られたイギリスとアメリカの和解――覇権の移譲――の事例に代表されるように、必ずしも大国間の緊張関係が戦争へと発展しないこともあるという。そこでは、支配国であるイギリスが、①アメリカ近隣にイギリスの強大な同盟国を有していない事実、②自国近くでアメリカとは別の台頭国――ドイツ――によるさらに大きな脅威に直面している事実、を理解した上、③アメリカという台頭国の挑戦を抑え込むことは不可能であるため、④その代替策として可能な限りアメリカの要望に応えるべきである、との大局的な判断を下したのである。だが、平和的な結末をもたらしたこのような要因は今日においては存在しない、とアリソンは危惧する。

興味深いことにアリソンは、トゥキュディデスが示した３つの要素の中でもとりわけ「恐怖」に注目する。確かに『歴史』には、以下のような記述が見られる。「アテナイが強大になり、ラケダイモン人【＝スパルタ人】に恐怖をもたらしたことが戦争を必然ならしめた（後略）」（上巻、28 頁）。「アテナイの勢力拡大をラケダイモン人自身が恐れたからであった」（上巻、78 頁）。

さらにアリソンは、①急速に台頭する国家、②それを恐れる支配国、に加えて、③それぞれが有する同盟関係のもつれ、が戦争へと導く傾向が強いとも主張する。大国の周辺地域での紛争が、同盟の存在によって、結果的に戦争に引きずり込まれるとの認識である。『歴史』には、「（前略）主にアテナイの未曾有の海軍力とペルシア戦に示された彼らの勇気に恐れを抱いた同盟諸都市にそそのかされたからであった」（上巻、79 頁）との記述がある。

では一体、こうした大国間の緊張関係が戦争へと発展しないためには何が求められるのか。アリソンによれば、「通常通りの仕事振り」「通常通りの官僚業務」「通常通りのリーダーシップ」では戦争への道を進むことになり兼ねない。そのため、大国――この場合はアメリカと中国――の指導者には、通常では考えられないほどの努力が求められるという。つまり、両国が抱えた懸案を下から１つずつ解決して積み上げていく通常のやり方ではなく、より大局的な見地から包括的な解決を模索するといった方策が必要とされる。そうすることによって初めてこの両国は「トゥキュディデスの罠」から逃れられる、とアリソンは主張する。

３．戦争と平和

実は、トゥキュディデスの３要素を援用して国際政治――戦争と平和――について論じたのは、アリソンが最初ではない。実際、アメリカの歴史家ドナルド・ケーガンやイギリスの歴史家マイケル・ハワードは、こうした要素に注目しながらある特定の戦争の原因について鋭く分析している。

例えば、ケーガンはその著『戦争の原因と平和の維持について』の中で、なぜ国家は戦争を行うのかとの問いに対して、トゥキュディデスの３つの要素を手掛かりに、ペロポネソス戦争、ローマとカルタゴの第二次ポエニ戦争（紀元前 218～201 年）、第一次世界大戦（1914～1918 年）、第二次世界大戦（1939～1945 年）、そして、戦争の目前にま

で発展したキューバ危機（及びベルリン危機）（1962 年）を事例として分析を試みている。

一方、ハワードは『第一次世界大戦』に代表される著作の中で、こうした３つの要素を援用しながらこの大戦が勃発した原因を以下のように分析する。第１に、人々が戦争を行う理由は単純であり、それは、戦争が「利益」に直結するからである。政治的であれ経済的であれ、利益をもたらすと考えられるため、時として戦争は魅力的に映る。実際、ヨーロッパ大陸でのドイツの覇権確立の阻止及び勢力均衡の維持、さらにはオランダやベルギーの領土保全といった、イギリスの利益を考慮することなく同国が第一次世界大戦に参戦した理由を理解することはできない。

第２に、トゥキュディデスの「恐怖」の要素を援用すれば、この大戦の原因は次のように的確に描写できる。すなわち、中部ヨーロッパ地域においては、ハプスブルグ（オーストリア＝ハンガリー）帝国の崩壊に伴ってロシアの力が強大化することに対するドイツの恐怖が存在した。他方、西ヨーロッパ地域ではドイツがヨーロッパで覇権を確立するかもしれないとのイギリスの恐怖が存在した。そして、ドイツとイギリスが共に抱いたこうした恐怖こそ、両国を戦争へと衝き動かした原因の１つなのである。第３に「名誉」であるが、実は一般的な認識とは対照的にこの要素は、「威信」や「信憑性」といった言葉に置き換えられながらも、今日でも戦争の原因を考える際の大きな手掛かりとなっている。この要素を第一次世界大戦に援用すれば、1914 年にイギリスがこの大戦に参戦した理由は、ベルギーの中立及び安全保障に対する同国の保証、さらには暗黙の内ではあるもののフランスに対する同様の保証を守らなければならないといった、イギリスの名誉が懸かっていたからである。

４．歴史の「教訓」？

言うまでもなく、歴史の安易な類比には大きな危険が潜んでいる。その顕著な事例が 1938 年の「ミュンヘン危機」である。1930 年代を通じてアドルフ・ヒトラー及びナチス・ドイツの台頭に断固たる対応を怠り、「宥和」に終始したヨーロッパ諸国、とりわけイギリスの外交政策から類比し、今日の国際政治において少しでも相手に柔軟な姿勢を示すと、直ちにそれを「弱腰」と捉える見方である。実は、これを第一次世界大戦に援用すれば、ドイツやオーストリアに対してイギリス、フランス、ロシアが必要な対抗策を用いなかったことが戦争へと発展した原因である、との見方も可能になる。

時代も国際環境も異なる 1930 年代のヨーロッパの「教訓」を、第一次世界大戦前夜や 1990 年代以降のイラクなどに安易に適用しようとすれば、どうしてもそれは恣意的なものとならざるを得ないが、この真実は、トゥキュディデスの３つの要素にも当てはまる。

実際、時代も国際環境も全く異なる大国間の緊張関係をトゥキュディデスの３要素を用いて説明しようとするアリソンの試みに対しては、多くの専門家から批判が寄せられている。例えば、デヴィット・ウェルチは 2015 年４月の論考「アメリカと中国はトゥキュディデスの罠を回避できるか」、さらに遡って 2003 年の論考「なぜ国際関係論の理論家はトゥキュディデスを読むことを止めるべきなのか」の中で、①時代錯誤、②正確性、③引用方法、の観点から、トゥキュディデスの３要素を今日の国際政治に適用することを強く戒めている。確かに正確性の観点に限っても、『歴史』から最も引用される「アテナイが強大になり、ラ

ケダイモン人に恐怖をもたらしたことが戦争を必然ならしめた」との一節も、必ずしも史料によって実証されてはいない。

事実、ウェルチの歴史認識はこれとは異なり、スパルタは合理的な計算の下に戦争を行ったというものである。すなわち、後に相対的に不利な条件で戦うよりは、今の時点で相対的に有利な条件で戦う方が望ましい、とのスパルタの計算の結果である。

また『歴史』には、偶然や運命としか表現し得ない要因、すなわち、人間の能力では予測も制御も不可能な要因によって、歴史が創られていることを示す事例で溢れている。ウェルチが鋭く指摘するように、『歴史』には大国が、①自ら戦争へと突き進む事例、②戦争へと引きずり込まれる事例、③何らかの失態により望まない戦争へと導かれる事例、など今日の国際政治学の基本概念となりそうな史実が多々記されているにもかかわらず、その中から３つの要素にだけ注目するのであれば、トゥキュディデスが示そうとした戦争観や平和観を正確には反映できない。

その意味において、歴史の「教訓」を語るには節度と慎重さが求められる。だが同時に、歴史の類比が孕む危険性を十分に認識しつつも、複雑な国際政治の様相を分かり易く説明しようとの試みにも大きな意義が見出せる。さらに言えば、アリソンの論考に代表されるような史実の慎重な引用であれば、その「教訓」にも大きな説得力が備わる。事実、『歴史』で示された戦争の原因をめぐる３つの要素は、今日においてもその妥当性と有用性を失っていないように思われる。

主要参考文献

- Graham T. Allison, "Obama and Xi Must Think Broadly to Avoid a Classic Trap," *New York Times* (6 June 2013).
- Graham T. Allison, "The Thucydides Trap," in Richard N. Rosecrance, Steven E. Miller, eds., *The Next Great War?: The Roots of World War Ⅰ and the Risk of U.S.-China Conflict* (Cambridge, MA: MIT Press, 2015).
- David Welch, "Can the United States and China avoid A Thucydides Trap?," (6 April 2015).
- トゥキュディデス著、小西晴雄訳『歴史』ちくま学芸文庫、上下巻、2013 年。
- Donald Kagan, *On the Origins of War: And the Preservation of Peace* (New York: Anchor, 1996).
- マイケル・ハワード著、馬場優訳『第一次世界大戦』法政大学出版局、2014 年。

(2016 年 10 月 6 日脱稿)

本稿の見解は、防衛研究所を代表するものではありません。無断転載・引用はお断り致しております。

ブリーフィング・メモに関するご意見・ご質問等は、防衛研究所企画部企画調整課までお寄せ下さい。

防衛研究所企画部企画調整課

外　線：０３－３２６０－３０１１　　専用線：８－６－２９１７１

ＦＡＸ：０３－３２６０－３０３４　　※防衛研究所ウェブサイト：http://www.nids.mod.go.jp/